

文京川柳会1月句会

2010・1・20 区民センター

正月句会は、ケーブルテレビのカメラ取材も入り、華やかな気分で行われました。文人の嗜み「詩吟書画刻」のお話を聞いた後、年頭吟の色紙への染筆は、もう二度目になる参加者もいてそれぞれ傑作を書き上げ、書初めによる正月気分を満喫。

さらに、正月らしい「ハッピー」の披講があり、楽しい時間はあつという間に過ぎました。

【つぼみ】

「ハッピー」

尾藤 一泉選

特

ベル鳴って無邪気な花の金曜日

佳奈子

羊水の中にいるよなバスタイム
でしゃばって当る吹き矢の青い鳥

晏 ね
幻 舟

彼からのメールに♡二つ増え

栄 七

琴線に触れ五線紙に舞う音符

敏 子

年始め深く味わう夫婦膳

幻 舟

幸せはかみさんがいてオレが居る

あさじ

飲み唄い叫んで あとは夢の中

佳奈子

幸福論掲げるほどでないハッピー

晏 ね

誰が為に鐘は鳴るなり初シヤワー

ふく代

仕事後のビールひと口 フォーと出る

文 泉

しあわせはコーヒー ケーキ ミュージック

ち よ

ママにこり オヤジの作るハンバーグ

文 泉

初句会 抜けて呼名が裏返り

牛 歩

シユート決め笑顔とろけるハイタッチ

つぼみ

見せかけのハッピー買って売る心

佳奈子

「ママ好き」と離れぬ娘 抱きしめる

つぼみ

やつとこさ彼女ができて減る預金

グレート秀

しあわせは片言で聞く「バアバ好き」

ち よ

飲んで寝つ 覚めては飲みつ 春三日

昭 邑

床入りの時を知らせる除夜の鐘

栄 七

孫自慢しあう婆らの日向ぼこ

昭 邑

甘酒の湯気につつまれ ほのぼのと

敏 子

川柳は、単に題を使って、それをドラマにして説明するだけでは面白みが出ません。作者自身の目で見つけ、体や心で感じた題との関わりを十七音に言語化していく必要があります。

作者の心やコトバの一部が作品に反映することにより、川柳という作品に魂が吹き込まれます。

佳奈子さんの「ベル鳴って」は、花金の作者の心が素直に描かれ、そのウキウキした気分は、読者への共感として普遍化されます。これは、本人自身の中に発見した「ハッピー」が、作品化されたものでしょう。

幻舟さんの「でつしやばつて」は、まさに自分の事を句にしたものですが、象徴としての青い鳥が、いかにもハッピーな気分への転化を詩的にしているようです。



川柳という短い表現の中に自分の気持ちや価値観、嗚呼伊よつては社会批評などを盛り込めるようになると、作品は単なる五七五から、文芸としての価値が生れてきますね。